

中国ロケット軍と DF-41 の位置づけ

漢和防務評論 20170501(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

既報のとおり、2016年11月、黒竜江省大慶市街地に、車載の中国ロケット軍の DF-41 型 ICBM が出現しました。
世界の情報機関は中国ロケット軍が意図的に公開したものと見ています。漢和が疑問を感じた点は、どうせ公開するのならば、なぜ正式に通信社を通じて公開しなかったのか？です。
推測できる理由の一つは、手続きが厳格すぎて正式に公開できないため、中国の軍事マニアの盗撮を利用してネットに流出するよう仕向けたとするものです。
中国ロケット軍は、秘密保全が厳格で、衛星写真でも発見できない部分が多くあります。

平可夫

2016年11月、DF-41 型 ICBM が大慶（黒竜江省）に出現した。国際情報界の一致した見方は、これは明確な戦略的威嚇であり、中国のようにひたすら秘密主義を貫く軍隊にとっては、疑問の余地なく故意に見せたのである、と。
しかし一連の疑問が残る：これは、官側が故意に見せたものならば、なぜ公式に新華社の写真を使わなかったのか？なぜこのような不鮮明な写真を使用したのか？撮影したのは民間人か？或いはロケット軍の人間か？中国のネット管理は厳重であるが、なぜ DF-41 の高精細でない画像を漏洩させたのか？故意か？無意識か？米国にどんな情報を伝えたかったのか？DF-41 は本当に大慶に配備されたのか？51 基地に配備か？司令部は通化（吉林省）にあるのか？

最後の問題について、KDR は大慶周辺の衛星写真を詳細に見たが発射陣地を発見できなかった。またロケット軍らしき施設も発見できなかった。一種の可能性として、51 基地に配備された DF-41 が大慶に機動し、低気温、雪地、平原地帯で試験を行ったか、或いは別の可能性として河南省信陽に配備された DF-41 が黒竜江省に機動して寒温地帯での試験を行ったか。もしそうだとすれば、今後も DF-41 は試験のため、高原や雨季のある南方地区に出現する可能性がある。

KDR が入手した価値ある情報は次のとおりである：

まず第一に、中国ロケット軍内部では、類似の活動を”威嚇の造勢”と呼んでいる。これは 1990 年代以降、すでに何度も行われてきた。時期的に最も早く ICBM による”威嚇の造勢”が行われたのは 1995 年の台湾海峡の情勢悪化時であり、中国は DF-5 型の官方写真を公開した。

このような威嚇方式は誰を威嚇するためのものか？米国の政府機関が大慶には

存在しないのに、なぜ正式に新華社が DF-41 の写真を公開しないのか？

これに対し、権威筋は次のように述べた：ロケット軍の ICBM の機動に際しては、厳格な各種規定がある。勝手に行動することは許されない。今回の行動は、当然米国人に見せるためである。

第一、ICBM の機動（移動）の時間、（春夏秋冬の）偽装方法、車間距離、車速、車隊の隊形には厳格な規定があり、違反は許されない。各ミサイル発射大隊は、米国の偵察衛星の上空通過時刻表を把握しており、随時アップデートしている。その後日本の偵察衛星の上空通過時刻表も加えられた。ロシアに対しては、ソ連時代から第二砲兵がソ連の衛星偵察から防護しており、現在も変わっていない、と。

平時、戦備のための機動に関して、ミサイル機動発射部隊（DF-41、DF-31、DF-21、DF-16 等）の移動は、通常黎明時、或いは雲が多い時間帯を選択する。現在、米国の合成開口レーダーは、雲の多い気象条件下でも高精細な写真を撮影することができる。したがってロケット軍の機動時間の選択は、日、米、露の偵察衛星の撮影時間をできるだけ避けるよう厳しく求められている。特に、日米の偵察衛星は避けなければならない。

したがって、DF-41 がこのタイミングで大慶に出現したということは、ロケット軍が日米の偵察衛星の上空通過時刻を掌握し、写真撮影されるのを避けた上での行動である。むしろ地上の人間に撮影させるためであったろう。大慶には確かに日米の政府機関は存在しないのだから。

なぜ中国政府が直接 DF-41 の写真を公開しなかったのか？

理由の 1：秘密区分が解除されていないためである。中国軍内部は、相当複雑な官僚主義が蔓延し、秘密主義的管理制度が存在している。軍事に関して、権威ある報道は「解放軍報」誌と新華社しかできない。新華社の軍事記者は現役の軍人であり、出国して外国軍の活動について報道する際、彼らは情報収集の任務を持っている。これは事実上のスパイである。米国やロシアでは、軍事基地で新華社の記者を駆逐する事件が発生している。

DF-41 の秘密区分を解除するには、相当高レベルの決裁が必要であり、ロケット軍内部や新華社には権限がない。したがってこの種の”民間によるやり方”（盗撮まがい）でしか DF-41 を公開する方法はない。

理由の 2：中国脅威論を鎮めるためである。軍の上層部は、特にロケット軍の ICBM を相当重視している。写真の公開も段階を経て審査する必要がある。

大慶の DF-41 の写真は民間人が撮影したのだろうか？

そのはずである。発見させるのであれば、主として日米の衛星に写真を撮らせるのが筋である。しかし中国軍は、必ず軍事マニアが市街地を徘徊しながら DF-41 の写真を撮るであろうことを知っている。

KDR は次のように推測した：DF-41 を大慶で発見させるには、時速 20KM で少なくとも 2 乃至 3 時間移動させることが必要だ。ロケット軍は、民間の撮影協力者（軍事マニア）を探すのは容易だ。一般状況下では、ロケット軍旅団は都市の近郊 20 乃至 50KM の位置にある。旅団内部に検査場があり、旅団の周囲 100KM が発射陣地の範囲である。陣地には偽陣地、訓練用陣地がある。大慶に出現した DF-41 が通化から機動してきた可能性もあるが、その場合、外部に曝される時間がさらに長くなる。

DF-41 の写真がネット上に出現しても、政府のネット管理部門は写真を削除しなかった。このことは、軍の三戦系統（宣伝戦、心理戦、法律戦）がすでに一致した威嚇政策を形成し、責任追及はないことを意味する。地方のネット管理部門は、必ずしもこれが何の写真かを知っているわけではない。それに気づき、地方のネット管理部門が上層部の指示で削除したとしても、DF-41 の写真はすでに外国のネットに流出している。これが、中国の軍事専門サイトが武器の名称について隠語を使う理由である。中国の軍事マニアだけがどのような武器か或いはその武器の意義を知っている。

したがって中国のネット上で、中国武器の動向を検索する場合、中国の軍事マニアの隠語を知らなければならない。一部の隠語は系統づけられている。例えば、” J-20 ” で検索した場合、必ずしも価値ある情報は出てこない。” 絲帶 ” で検索すると、興味ある内容を捜すことができた。隠語は随時変更される。ネット管理部門もまた学習している。なぜ J-20 でなく、” 絲帶 ” を使うのか？” 絲帶 ” の中国語発音が ” 四代 ”（中国で第四世代戦闘機の意）と同じだからである。軍事マニアは、漢語をキーボードにピンインで打つとき、面倒なので変換せず ” 絲帶 ” を使う。したがって ” 絲帶 ” は何かの ” 愛称 ” ではない。

DF-41 の発射手順は？ KDR の研究結果：中国の ICBM 発射の指揮は、軍事委員会に高度に集中している。相当厳格な戦闘条令（規則）があり、源泉はソ連軍である。その後、パキスタン軍の戦略ミサイル部隊でも参考にされた。したがってパキスタン軍の発射条令は中国軍に酷似している。第二砲兵が最も早く装備した地対地ミサイルは、ソ連の P-2 であり、最も早く制定された条令は「P-2 ミサイル大隊戦闘使用条令」である。

現在、ロケット軍の ICBM の発射は、明確な条令が制定されている。新型 ICBM が就役する度に、対応した条令が制定される。これらの条令は：” ロケット軍核反撃作戦準備等級規定 ”（4 級から段階的に昇級する。3 級からは直接 1 級に昇級させることができる）、” ロケット軍ミサイル旅団、発射大隊作戦条令 ” 等が含まれる。

DF-41 が就役した後、最初に” DF-41 ミサイル発射大隊戦術”” DF-41 ミサイル作戦指揮”等の諸規定が編纂されるはずである。ロケット軍には、厳格な”戦役法””戦役学教材”があり、核反撃の定義、方法、過程、指揮機構に関し、予め明確な規定がある。また正式に”戦役綱要”が定められている。

大慶の DF-41 は実弾が装填されていたか？

北京の閲兵式に展示された DF-31A、大慶市街に出現した DF-41 は実弾が装填されていたのか？或いはなかったか？戦略威嚇、宣伝、心理戦においては戦略兵器に実弾を装填する必要がない。多くの橋梁や街道は通行する際に重量制限がある。戦時以外は必要がない。

ロケット軍の条令によると、DF-41 機動発射部隊はミサイル陣地と弾頭基地で構成される。平時は弾頭を装備していない。聯合戦役核反撃を実施するときのみ、弾頭基地は直接かつ迅速にミサイル部隊に核弾頭を提供する。この点は、旧ソ連の戦略ロケット軍と同じである。

KDR はすでに説明したが、通化（吉林省）には DF-31 型 ICBM が配備されている。DF-41 と同様に 51 基地に属する。したがって、今後、2 種類のミサイルで、2 個以上の基地を使用した核反撃演習が行われる可能性がある。ロケット軍内部では”高級戦役軍団”と称される。1 個の基地を使用して核反撃を 1 回行うことを想定した部隊は”基本戦役軍団”と称される。

KDR が疑問に思うことは、DF-41 が”最初の攻撃群”として使用される可能性があることだ。なぜなら機動性が高いからだ。それならば旧式の DF-5 型 ICBM は”事後の攻撃群”になるのだろうか？すなわち核戦役の予備部隊になるのだろうか？しかし米国を相手にするのであれば、DF-5 のサイロ型陣地は容易に第一撃を受けるであろう。

当初の段階で、ロケット軍は DF-41 旅団を 2 個建設する可能性がある。しかし生産に要する時間から見て、2016 年には必ずしも充足はできない。したがって DF-41 の各部隊は訓練用の DF-41 を装備する可能性がある。

1 個 DF-41 旅団の構成：

基本攻撃群は、装備検査連隊、電子対抗支隊、防衛作戦支隊で構成される。予備攻撃群の編成は基本攻撃群と同じである。支援群は、主として作戦、後方、装備支援支隊をそれぞれ支援する。予備攻撃群部隊は、通常基本攻撃群の三分の一である。言い換えれば、一旦核戦争が始まると、16 発の DF-41 で編成される 1 個旅団は、基本攻撃群の DF-41 の保有数は 12 発で、残りの 4 発が予備攻撃群保有となる。

DF-41 による核反撃の決定権は、軍事委員会に高度に集中している。例えば、

攻撃目標、反撃の時期、破壊の程度、核攻撃の量等々の問題は、習近平が自ら決定する。

DF-41 の発射指令の下达の手順は：中央軍事委員会習近平→ロケット軍戦役軍団指揮部（ロケット軍指揮部）→DF-41 信陽ミサイル基地指揮部、弾頭基地指揮部→DF-41 ミサイル旅団、装備検査連隊、持運連隊（註：輸送部隊か？）、の
はずである。

DF-31A の発射手順も同じである。DF-41 を運用する権限は、中央軍事委員会から”ロケット軍戦役軍団指揮部”、（また”聯合核反撃戦役指揮部”とも称される）への直接指示がなければならない。その後、下部組織の信陽 DF-41 ミサイル基地指揮部に下達され、最後に DF-41 旅団に下達される。

DF-41 の指揮部は：基本指揮所、予設指揮所、前進指揮所、後方指揮所で構成され、基本指揮所に指揮センターがある。意志決定は 4 名で行われる。それぞれ、司令、政治委員、参謀長及び DF-41 総設計師の 4 名である。このほかに火力センター、情報センター、通信センター、情報作戦センターがある。

不思議なことに、KDR は、大慶、一馬平川、多湖泊、沼澤に発射陣地を発見できなかった。KDR は、大慶に実際に DF-41 が配備されているかどうか疑っている。

DF-41 を発射する場合、

通常の手順その一：信陽の発射部隊は最初に 3 級戦備状態になる。核基地の第一党委員会指導グループが基本指揮所に入る。第二党委員会指導グループは日常業務を継続する。

手順その二：DF-41 の諸元電子テストを行う。テストを完了させる。この段階の電子テストの内容は、攻撃技術テスト、姿勢制御テスト、爆発コントロール、安全装置テスト、電子テストの完成である。最後の電子テスト段階で DF-41 に問題が発生した場合、総エンジニア及び総設計師は直ちに対策を講じなければならない。したがって DF-41 の総設計師は聯合核反撃戦役軍団指揮所のメンバーである。

通常、”機動発射部隊”（DF-41/31 装備部隊）は、発射陣地で発射準備を行っているのではない。上述のテストを洞窟内部で完了すると、ミサイル発射車が円形の発射場の中心点に進出してミサイルを発射する。KDR は大慶周辺にこのような円形の発射陣地を発見できなかった。不思議である。

DF-41 を発射するには、当然軍事委員会がロケット軍の第一級戦備状態を宣言する。その後発射命令が核ミサイル発射部隊に暗号で伝えられる。第二指導グループが予備指揮所に入る。

2000 年以降、第二砲兵は、”重点反撃”方式による”確実な核報復”を提議した。核攻撃の目標選定は、平時は、戦略支援軍第 2 部、3 部、4 部、軍事委員会通信部、測絵局、気象局、ロケット軍情報部が分類し、評価し、整理し、保存する。

DF-41 が信陽に配備され、大慶に機動したということは、一旦、米国との核戦争が生じたならば、この両都市が米国の最初の攻撃目標となることを意味する。DF-41 は必ず地下の洞窟に入っている。最初の核攻撃を受けた後は、発射旅団のコンピューター、電力、自動車での行動は、強い放射能の影響を受け、行動不可能になる。1955 年のソ連軍の大規模核演習では、全ソ連軍の通信が臨時中断した。この種の状況が発生した場合、中国はどのように対処すべきか？

ロケット軍の作戦条令によると、戦役指揮部は、少なくとも 4 名以上の”将校連絡グループ”を直接 DF-41 ミサイル旅団に派遣し、直接対面方式で指揮を行う。通常、”将校連絡グループ”は、3 つの機密文書を携帯している。機密文書とは：最高統帥部（中央軍事委員会）命令、ロケット軍司令部（核反撃戦役軍団指揮部）命令、ミサイル発射命令である。

DF-41 ミサイル旅団は、すでに受領している最高統帥部命令に基づいて発射準備を進め、”将校連絡グループ”の到着を待たねばならない。

KDR が興味を持ったのは：

将校連絡グループは如何なる手段で核攻撃を受けた大慶市、信陽市に進出するのだろうか？ヘリを使うのか？落下傘降下するのか？前者は、核汚染された電磁輻射に対抗することはできない。ロケット軍は自隊のヘリを保有しているのか？または戦時に空軍の支援を要請するのか？もし後者ならば、核反撃作戦中の跨軍種聯合作戦となり、中国軍はどのように協同すべきか？

DF-41 の攻撃目標（座標）は平時からすでにセットされている。当然米国も同じである。しかし、戦時に攻撃目標の変換が必要になった場合、ロケット軍の”特殊状況処置”条令によると、目標変換は中央軍事委員会主席習近平の決定を経なければならない、としている。

以上